

歴史街道第 1 1 期計画

2024年度～2026年度

2024年10月

歴史街道推進協議会

目 次

はじめに	… 2
『「歴史街道」づくりの提言』	… 4
 第 1 1 期中期計画資料	
第 1 0 期中期計画総括	… 7
第 1 0 期中期計画（取組み方針）	… 7
第 1 0 期中期計画の進捗状況	… 8
実施項目	… 1 0
助成金・受託事業等	… 1 0
地域別取上げ回数（2021～2023 年度）	… 1 1
歴史街道推進協議会の会員数推移	… 1 2
歴史街道倶楽部の会員数推移	… 1 3
事務局職員数	… 1 3
年度別収入の推移	… 1 4
年度別支出の推移	… 1 4
第 1 0 期の取組みに対する評価	… 1 5
 第 1 1 期中期計画	… 1 6
第 1 1 期中期計画策定における基本的考え方	… 1 7
第 1 1 期中期計画の取組み方針	… 1 7
第 1 1 期中期計画における方向性のまとめ	… 1 8
第 1 1 期中期計画における活動	… 1 8
第 1 1 期中期計画における活動【具体事例】	… 2 4
第 1 1 期中期計画の取組み方針	… 2 7
主要事業施策	… 2 7
収支計画(収入)	… 2 8
収支計画(支出)	… 2 9
第 1 1 期中期計画に関するご意見	… 2 9
第 1 1 期中期計画策定のスケジュール	… 3 5
 参考資料	… 3 6

はじめに

日本文化の発信と継承を目的とした「世界を考える京都座会」の「歴史街道」構想の提言（昭和63年（1988年）3月）を受け、平成3年（1991年）に歴史街道推進協議会（以下、協議会）を発足。「歴史街道マスタープラン」、「同マスタースケジュール」を推進指針に、平成6年（1994年）に第1期中期計画を策定。以来3年毎に中期計画を策定し、官民が広域的に連携しながら各種事業を推進してきました。本書はその「第11期計画」であり、令和6年度（2024年度）から令和8年度（2026年度）までの事業の方向性を示したものです。

第11期中期計画の策定に当たっては、まずは令和2年（2020年）に発生した新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）の影響を受けた第10期における各種事業や付帯重要案件等の進捗状況を確認し総括を行いました。

合わせて、会員の皆様から第10期の評価と第11期計画策定に当たってのご意見をお聞かせいただきました。

それらの評価を取りまとめたところ、「概ね計画通り事業が進められた」「謎解きゲームは、鉄道の楽しさや地域の歴史を知ることができ、面白いツールであった」「数多くの事業に取り組んでいる」等といった肯定的な評価をいただく一方、要努力評価では、「コロナ禍の影響で、拠点全域での連携事業に着手できなかったのが残念であった」「大阪・関西万博の開催を見据えたインバンドに対する誘致を考慮に入れた展開が出来ていなかった」「若年層をターゲットに SNS をより使って、プロモーションを展開する必要がある」等といったより一層努力を求められる評価もいただきました。

また、第11期中期計画策定に当たっては、「事業の方向性として、財源やマンパワーを考慮し、事業の選択や集中が必要である」「SNS を使った情報発信や MaaS との連携等 DX の推進に注力すべきである」「大阪・関西万博を見据えて、多言語化の展開等のインバンド対策が必要である」「スタンプラリーや歴史街道倶楽部運営に関する新たなご提案」「外部組織との連携を強化すべき」等より具体的なご提案をいただきました。

これら会員の皆様からの評価、意見・要望を踏まえ、専門部会を立ち上げ、同部会において検討を行い、以下の基本方針に沿って、第11期中期計画を策定いたしました。

次の世代への文化の継承・文化観光を活用とした日本文化の発信・持続可能な推進体制を目指す。

第11期中には、令和7年（2025年）に大阪・関西万博が開催され、内外から多くの人が関西を訪問することになり、日本の歴史文化を広く発信できる絶好の機会と考えられます。そこで第11期中期計画では、「歴史街道の原点に立ち返り、古代から現代まで1500年の歴史の舞台を一筆書きでつなぐことができるメインルート及び戦国～江戸時代・古代史・紀伊半島の各ネットワークを活用した事業を積極的に推進する」を事業方針に

1. 広域連携による地域の魅力発信
2. 次世代に向けた文化の発信と継承
3. 大規模イベントの活用
4. D Xの推進

を強化ポイントとして、取り組んで参ります。

さらにこれらを実現させるための基盤強化として

1. 人的ネットワークの拡大
2. 収益事業の強化

も図って参ります。

第11期中期計画での取組みを通して、関西地域の人はもちろん令和7年(2025年)の大阪・関西万博等に来られる多くの内外の人へ、歴史街道としての情報を広く発信し、日本の歴史文化の浸透に努めていきたいと考えております。引続き、協議会の活動に対し、会員の皆様並びに関係各位のご支援・ご協力をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

2024年7月
歴史街道推進協議会

『「歴史街道」づくりの提言』

外国人に「日本について何を知っていますか」と尋ねると、まず返ってくるのは商品と企業の名前です。経済大国の日本としてそれは当然でしょうが、それ以外のことがほとんど知られていないのは寂しいことです。文化や歴史、功績ある人々の名前などがほとんど知られていないのです。

「人間の顔のない経済大国」、「商品を吐き出すブラックボックス」。日本に対するこうした評価は正しいものではありませんが、私たち日本人もこれまでは、自国の文化や伝統、こころや生活感覚を世界に知らせようという意識が薄かったことも事実でしょう。いや今も、日本の文化やこころを知らせるのは、貿易摩擦のため、よりよい経済関係を深めるため、つまり経済が目的で文化やこころの問題はそのための手段という気持ちがあるのではないのでしょうか。

さらにいえば、私たち日本人自身も、物質的な豊かさ、物理的環境の快適さや便利さを追いつめるのに忙しく、その根底にある日本の文化や伝統や特有の発想について考える余裕を失っているくらいがあるのではないのでしょうか。

今や日本は、世界の16%もの生産力をもち、世界の総輸出の5%にも当たる貿易黒字を計上し、世界中の貯蓄の半分以上を占める巨大な経済力をもつようになっています。日本の経済は、私たちの実感をはるかに超えて、国際化し巨大化しているのです。このままでは日本は「金儲けにしか関心のない国」という評価が定着してしまう恐れがあります。

このような現実を超え、日本人自身も外国の人々にも、長い歴史に培われた日本の文化とこころを深く認識するような実効ある具体的な計画を考える必要があると考えます。

そこで、私たちが着目したのは、日本の文化、日本人のこころが形成された過程を、その現場において見聞することです。

独特の風土を持ったこの国土で生まれた日本文化には、特有の性格があります。同時に世界にも類例のないこの国土の文明的位置の故に、東洋と西洋の文明を巧みに吸収し消化することもできました。現代の日本の文化と日本人のこころは、そうした歴史の成果として築かれたものです。従ってこれを正しく認識し深く理解するためには、歴史現場においてそれぞれの時代の文物と環境を味わうことが大切でしょう。

文化を知りこころを解するためには、書かれた文章を覚え、並べられた事物を知るだけでは充分ではありません。体験の記憶と自ら試みた実感をもって親しみひたるのでなければ、本当の文化を知ることにはならないのではないかと思います。

このような考え方から、私たちは日本の文化と歴史を体験し実感する旅筋、いわば「歴史を楽しむルート」としての「歴史街道」の開発整備を提唱するものです。

幸いにして日本では、主要な歴史の現場を、ほぼ歴史年代の順に訪ねる旅をすることができます。それは、さほど遠い距離でもなくあまり長い時間をかけることもない範囲にあります。つまり、「勤勉に楽しむ」日本人の性格にも、短い日数で日本を訪れる外国人にも、無理なく巡れるルートとなり得るのです。

この「歴史街道」構想は、日本人のこころに伝えられてきた「生なり」の文化の源流というべき神話の地・伊勢からはじまり、古代から中世にかけての三つの都ー飛鳥、奈良、京都ーとその近郊を巡り、秀吉以降の商人文化の中心地「大阪」、明治以降の国際交流を象徴する神戸を結ぶこととなります。

勿論、日本文化の最も古い歴史をもつこの地域には、多くの歴史文物があり、伝統的な行事や芸術技能が保たれております。また、隠された文物や知られざるころの跡も多いことでしょう。さらにこれから追加すべき「もてなし」のハードやソフトの開発も重要になるでしょう。新しい技術や思想を吸収し活用してきた日本の歴史そのままに、高度な技術や斬新な発想を導入しなければならないことも多いに違いありません。快適な移動方法や多彩な楽しみの導入も大切です。「歴史街道」は、常に開発され更新される知的な観光ルートでなければならないと思うからです。

文化は突如として興るものではありません。伝統を大切にしない文化が長く栄えたためしはなく、新しい技術と発想の導入なしに長く保たれた伝統もまたありません。豊かな国になった日本は、その歴史とところに根づいた文化を、歴史の現場から世界に発信する必要があります。私たちは、この「歴史街道」を現代に生かすことが、二千年の日本の歴史に新しい楽しみを加えると共に、百年後、千年後に現代の英知と繁栄を伝える試みでもあることを願うものです。

今、日本では新しい街づくり、新しい国際交流の場の建設が進められていますが、同時に先人から受け継いだ歴史の現場を、新たな知的興奮の舞台にすることも大切ではないでしょうか。

1988年3月

世界を考える京都座会

松下幸之助	天谷直弘	飯田経夫
石井威望	牛尾治朗	加藤 寛
高坂正堯	堺屋太一	斎藤精一郎
広中平祐	山本七平	渡部昇一